



目次

拾い子 ハイน์リヒ・フォン・クライスト	1
----------------------------	---

拾い子 ハイน์リヒ・フォン・クライスト

ローマ人の裕福な土地商人、アントニオ・ピアーキは、しばしば商用による長旅を余儀なくされた。そのような折にはいつも、ローマの親類宅に若妻のエルビーレを預け入れるのが常であった。そのような旅先でのこと、先妻との子である十一歳のパオロを連れて、彼はラグーサに入った。折しもペストに似た疫病がその地で猛威を揮い、市とその周辺を大きな恐怖に陥れていた。旅の途中、この知らせを耳にしたピアーキは、事の成り行きを見定めるため、郊外での逗留を決めた。しかし、災禍が日毎に悪化の一途を辿り、市門の閉鎖も取り沙汰されたと聞くに及び、息子への配慮はあらゆる商売上の利害を上回った。彼は馬を駆り、もと来た道を取って返した。

ようやく市から出たところで、ひとりの少年が馬車の横に立っているのに気がついた。その手は嘆願者のように広げられて、激しく動揺しているのが見て取られた。馬車を停めて、何を望むのか？ と、ピアーキが尋ねた。病気に感染して、病院にぶち込もうとする官憲たちに狙われて、すでに父と母はその病院で亡くなっておりますと、無邪気な顔で、少年が答えた。彼は、あらゆる聖なるものに賭けて、ここから出して欲しい、市の中で破滅させないで欲しいと、ピアーキに懇願して、その手を掴んで、強く握り締め、接吻して、その上に涙を注いだ。嫌悪に震えるピアーキの原初の本能がしたことは、少年の突き放しであった。しかし、その瞬間、少年が顔色をなくして、卒倒して、大地に倒れ伏したので、その善良さから、老人は憐憫の側に心を動かした。息子と共に馬車から降りると、少年を車室に横たえさせて、その場を後にした。これから彼との間で何が起きるのか、深い考えもなく。

駅馬車の最初の宿で、どうやって少年を厄介払いしようと宿の主人と相談していると、先回りした官憲の命令で、彼と息子とニコロ（それが、病気の少年の名前であった）は逮捕されて、ラグーサまで連行されてしまった。このような仕打ちは非道であるとのピアーキからのあらゆる抗議は、徒労に終わった。衛兵と共に、ラグーサに戻された三人は、病院まで搬送された。そこではピアーキは感染しなかった。少年は病気から回復した。しかし、彼の息子、十一歳のパオロは、少年から感染させられて、三日後、亡くなったのであった。

再び市門は開かれた。息子の埋葬を終えたピアーキは、官憲からの出立の許可をえた。悲しみから来る苦悶の中、彼は馬車に乗り込むと、隣のガランとした座席を見るなり、泣くためのハンカチを手を取った。そこに、帽子を手にしたニコロが馬車に近寄ってきて、旅の無事を祈りますと、語りかけた。ピアーキは窓から身を乗り出すと、激しい嗚咽のために途切れがちとなる声で、よければ、一緒に来ないか？ と、言った。老人の言う

ことを理解するが早いのか、少年はコックリと肯くと、ええ、喜んでと、答えた。少年を馬車に乗せてもよいかという商人の問いかけに、病院の衛兵は、微笑みながら、この少年は、誰も不在を悲しむ者がいない神さまの子ですからと、確約してみせた。深く感動したピアーキは、少年を馬車に引き上げて、かつての息子の席に座らせると、ローマへの帰途に就いた。

市門を出ると、土地商人は、馬車に揺られながら、初めて少年のことをマジマジと見た。少年は、独特で怜悧な美しさをもち、その黒髪は、一度巻いた後で額に垂れ下がり、生まじめで知的な、決して表情を変えない顔に影を落としていた。老人は幾つかの質問をした。しかし、少年はそっけない答えを返すばかりで、押し黙り、内界にうち沈み、ポケットに手を入れて、車室の隅に座り込んでいた。内気な思慮深い目で、馬車が駆けていく風景にジッと目をやっていた。時折、極めて小さな動きで持参した袋から一掴みの木の実を取り出すと、ピアーキが涙をぬぐう傍らで、奥歯で噛んで、ガリリと砕いていた。

ローマで、ピアーキは起こった出来事をエルビーレに簡単に説明すると、少年を彼女に紹介した。彼の優れた若妻は、実際、深い愛を感じていたかわいい継子を思い出して、衷心からの涙が溢れるのを止められなかったが、そこに立つニコロを、所在なげで身体を硬くした状態のまま、静かに自分の胸に迎え入れると、かつてパオロが寝たベッドは譲り渡して、子の衣装全ても贈り物として与えてやった。ピアーキは、少年を学校に通わせた。そこで少年は、読み書き、算数、理科を身につけた。容易に想像がつくように、高い代償を払うことで、ピアーキにとっての少年は、ますます手放せない存在になっていった。そのため、数週間もせぬうちに、今では老人から子種を授けられる見込みのない善良なエルビーレの同意もあり、彼は少年を嫡子として迎え入れた。その後、様々な理由で満足できなかった番頭には暇を出すと、かわりにニコロをカウンターに座らせて、彼は、息子が多くの複雑な仕事を極めて熱心に上手くやり繰りするのを見るという喜びをえたのであった。邪教への公然たる反対者であった父親が息子の中に見た唯一の欠点は、いつの日か、老人の遺言で転がり込むであろう財産を目当てにこの若者に入れ上げる、カルメル会修道院の僧侶らとの交遊であった。母親から見た唯一の欠点は、かなり若いうちから（と、彼女には思われた）息子の中で渦巻いているように見える、異性への情欲であった。なぜなら、彼は、弱冠十五歳で、すでに述べた僧侶らとの交遊の中で司教の妾のザビエラ・タルティーニという女の誘惑を受けて、ピアーキからの厳粛な命令ですぐに関係は断つよう求められたが、エルビーレには、この危険な領域における彼の克己心が決して強くないと考えるだけの多くの理由があったのである。しかし、二十歳の年、エルビーレの監督の下、ローマで育てられていた彼女の姪の若く愛らしいジェノバ娘、コンスタンツァ・パルケットと結ばれたことで、少なくとも後者の欠点は根本から消えたと考えられた。両親は、彼への満足という点で意見を同じくし、そのことの証しとして、美しく広々とした邸宅の大部分を彼に譲渡して、輝くほどの持参金を与えてやった。また、ピアーキは、六十歳になるとすぐ、息子にしてやれる最後にして、最大のこともしてやった。彼は、正当な法的手続きを踏んで、自分のための小さな貯えだけを残して、土地事業が基礎を置く全財産を息子に託すと、この世に望むところが薄い善良で公正なエルビーレを伴って、隠居したのである。

エルビーレの性格には、静かな悲しみの気分、子ども時代の歴史の中の痛ましい出来

事の残滓があった。ジェノバの裕福な染物屋をしていた彼女の父親、フィリッポ・パルケットは、生業が命じるまま、角石に縁どられて、裏手が海に面した屋敷に住まっていた。破風に嵌め込まれた大きな梁が何ヤードも海に突き出して、そこに染色した布が掛けられていた。屋敷に火の手が上がり、屋敷を形づくる全ての部屋が、まるで瀝青や硫黄でできているように同時にパチパチと音を立て始めたある不幸な晩、当時、十三歳だったエルビーレは、あちらこちらで炎に追われて、ある階から別の階へと逃げ惑い、ふと気づくと、これらの梁の一本の上にわが身を見出し出していた。あわれな子は、天と地の間で宙吊りとなり、どうしたら助かるのか、全く見当もつかなかった。背後には燃え盛る破風があった。そこでは、あちこちで風に煽られた火焰が、梁の中に触手を伸ばそうとしていた。眼下には、果てしない、荒涼とした恐怖の海があった。彼女が、全ての聖者にわが身を委ねて、二人の悪魔のうちでもいくらかましな側に思いを定めて、波頭に身を投げようとしたその瞬間、突然、貴族階級出身のひとりの若いジェノバ人が、破風についた扉を開けて姿を現わし、マントを梁の上になぐり捨てると、彼女をしっかりと抱き、大胆かつ細心に梁に掛けた濡れたシーツのひとつを伝わりながら、海上まで彼女を降ろしてやった。そこから二人は、港を漂っていたゴンドラに救助されると、歓喜の雄叫びに包まれながら、岸まで運ばれていった。ところが、この英雄的な若者は、屋敷から外に踏み出そうとしたその瞬間、上の階の外壁につけられた飾り棚からの落石で、頭に重傷を負っていたことが明らかになった。すぐに彼は意識を失なって、その場に倒れ込んだ。そのまま、父親の侯爵の邸宅に搬送されたものの、なかなか回復しない息子を見て、父親はイタリア全土から医者呼び集めた。医者たちは、何度も糸のこぎりで頭を開いては、幾つもの骨片を頭蓋内から取り除いたが、神からの不可知の命令によって、あらゆる施術は奏功しなかった。看病のために母親が呼んだエルビーレの手を借りてさきまにしかベッドを離れられず、そうやって寝たきりとなって、果てしない苦痛に苛まれた三年を経た後（その間、少女は、片時も側を離れなかったが）、もう一度、優しく彼女に手を差し伸べて、亡くなったのであった。

若者の屋敷と取引関係にあり、エルビーレが彼を看病する間に彼女をよく知る仲となり、二年後に結ばれたピアーキは、彼女の前では男の名を口にしない、あるいは、男のことを思い起こさせないことに細心の注意を払っていた。なぜなら、そうだったが最後、彼女の繊細で美しい精神がどれほど激しく掻き乱されるのかを、よく分かっていたのである。苦難の中、若者が亡くなった往時を偲ばせるほんのわずかの物事は、どれほどかけ離れたことでも、常に彼女を悲しみの淵に追いやり、そうなる彼女に慰めや安らぎの時はなかった。どこにいようと、彼女はその場を離れて、誰もそれを追わなかった。なぜなら、ひとりで泣いて悲しみに身を委ねさせる他、どんな救いもないと分かっていたのである。これらの頻発する奇妙な発作の原因を知っていたのは、ピアーキだけであった。なぜなら、彼女がこの出来事について語ったことは、その生涯で、ただの一度もなかったのであるから。それらは、結婚後すぐに彼女が患った高熱の後、過敏な状態で残された神経組織のせいとされるのが常であった。そういうことで、これらの原因のさらなる探求には終止符が打たれるのであった。

ある日、ニコロが、父親の諫めも聞かず、いまだに関係を断ち切れずにいたザビエラ・タルティーニと、密かに、妻にも気取られず、友人から招待されたという口実でカーニ

バルに出掛けて、皆が寝静まった夜更け過ぎ、たまたま選んだジェノバの貴族の仮装に身を包み、屋敷に戻った時のことであった。その時、ちょうど老人が急な体調の不良を訴えて、女中が不在だったのもあり、彼の介抱のため、酔入りの壺を取りに、寝床からエルビーレが起き上がって、食堂まで出てきていた。彼女が、部屋の隅にあった戸棚を開けて、椅子の縁に立ち、グラスや卓上壺の間をあれこれ探し回っていた時のこと、廊下で灯したキャンドルを手に、羽根つきの帽子、マント、剣という出で立ちで、静かに扉を開けて、ニコロが広間に入ってきた。エルビーレのいる方には目もくれず、無邪気な様子で、自室に通じる扉に手を掛けると、驚いたことに、そこには鍵が掛けられていた。その時、エルビーレが、背後で、彼の姿を一目見るなり、不可視の雷電に撃たれたかのように、手にした壺やグラスごと、立っていた椅子からタイル張りの床に昏倒した。驚きの余り、蒼白となったニコロは、後ろを振り向き、不幸な女を助け起こそうとしたが、彼女が立てた物音が、やがてピアーキを呼び寄せるのは必定で、それによって、自分が叱責されてしまうという恐れは、他の全ての考慮を凌駕していた。死に物狂いの性急さで、彼女が腰から提げていた鍵束を奪うと、あう一本をそこから見出し、鍵束は広間に投げ捨てて、彼はその場を後にした。病を押して、ピアーキがベッドから起き上がり、彼女を助け起こした。と、同時に、彼が鳴らした呼び鈴で、女中や召使たちも灯火を手に集まって、ニコロもまたガウンに身を包んでそこに姿を現わして、何があったのですかと、聞いた。しかし、驚きの余り、舌をもつれさせたエルビーレは一言も口が利けず、彼女を除けば、この問いに答えられるのはニコロだけであったので、一切の顛末は永遠の謎として残されることになった。エルビーレは全身を痙攣させながら、ベッドに運ばれて、熱に浮かされて何日かを過ごしたが、自らの健康という蓄えによって発作を乗り越えると、奇妙な気鬱を残した以外は相当に元気を回復した。

それから一年が経ち、ニコロの妻、コンスタンツェが赤ん坊を産んで、その子と共に、産褥の床で亡くなった。有徳かつ忠節な存在をなくしたことで、この出来事はそれ自体が悲しむべきであったが、ニコロの二つの情熱である偽信心と異性愛に再び火を点けたことで、二重の悲しみとなった。日がな一日、無聊を慰めるという口実で、再び、彼はカルメル会の修道士の僧房に入り浸ったが、かといって、妻の存命中からすでに全く愛や忠義を感じていなかったのは、衆知の事実であった。実際、早くもある日の夕刻、目前に迫った葬儀の仕事で彼の部屋に足を踏み入れたエルビーレは、もっぱらザビエラ・タルティーニの女中として知られた少女（裾はからげて、顔には化粧が施されていた）と彼と一緒にいるのに出くわしたが、その時、何とまだコンスタンツェは埋葬すらされていなかった。エルビーレは、この光景を前に目を伏せると、一言もせず、クルリと後ろを向いて、その場を立ち去った。ピアーキも他の誰も、この事件について知ることはなかった。悲嘆に暮れたエルビーレは、ニコロへの愛を貫いたコンスタンツェの遺骸の前に跪いて、泣くだけで十分だったのである。しかし、たまたま市中に出ていたピアーキは、屋敷に戻った際、その少女とバッタリ出くわすと、その用件が何かをすぐに嗅ぎ取り、少女に詰め寄って、半ばは策略、半ばは力づくで、彼女がもっていた手紙を奪い取ってしまった。彼がを読もうと自室に入ってみると、案に違わず、自分が望む逢引きのため、都合のよい場所と時間を決めて欲しいというニコロからザビエラへの性急なる嘆願であった。ピアーキは椅子に座ると、筆跡を偽わって、ザビエラの名前で返事を認めた。

「すぐに、まだ日の落ちる前に、マグダラのマリア教会で。」——そのメモを、自分のものでない印蠟で封印すると、あたかもザビエラ自身が書いたかのように、ニコロの部屋まで届けられるようにした。策略は的中した。ニコロはすぐさまマントを手にとると、棺に安置されたコンスタンツェのことなどすっかり忘れて、屋敷を抜け出した。それから、すっかり面目を失なわせられたピアーキは、翌日に予定された荘厳な葬儀を取り止めると、何人かの運搬人に、そこに置かれたままの状態でも遺体を抱え上げるようにと命じた。そして、エルビーレと彼と何人かの親類のつき添いだけで、彼女に用意されたマグダラのマリア教会の丸天井の全き静寂の下に、遺体を埋葬させたのであった。ニコロは、マントに身を包んで教会の回廊のところに立っていたが、知った顔ばかりの葬列がやってくるのを見て、非常に驚き、棺につき従っていた老ピアーキに、どういう料簡です？

誰の棺を背負っているのです？ と、聞いた。しかし、ピアーキは、祈祷書を手に、俯いたままで、ザビエラ・タルティーニとだけ返事をして、——事、ここに至って、遺骸はまるでニコロなど眼中にないかのように、もう一度、皆の前で棺が開かれて、参列者からの祝福を受けながら、その後、ソロソロと穴の中に降ろされて、丸天井の下、封印されたのであった。

彼を深く恥じ入らせたこの出来事は、その不幸な心に、エルビーレへの燃えるような憎悪を目覚めさせることになった。というのも、彼は、ピアーキが公衆の面前で与えた恥ずかしめを、エルビーレの仕業と信じたのであるから。ピアーキは、何日も彼と口を利こうとしなかった。とはいえ、コンスタンツェの遺産を受けるに当たって、ピアーキからの好意や親切は必要だったので、ある日の夕べ、彼は、老人の手を握り締めると、さも後悔しましたという顔をして、ザビエラとの即刻かつ永遠の別れを約束せねばならない自分を感じたのであった。しかし、こんな約束を守る気などサラサラなかった。むしろニコロに対して行なわれた抵抗は、彼の挑戦心に火を点けて、誠実なピアーキの目を掠める策略を上達させるだけに終わってしまった。と、同時に、自分の破滅に向けて、女中がいた部屋の扉を開けて、またすぐに閉めたあの瞬間ほど、彼がエルビーレを美しいと感じた時もまたなかったのであった。柔らかな燠火により、両頬の上で赤い炎を上げた嫌悪感は、優しい、滅多に感情に動かされない彼女の横顔に、限りない魅力を注いだのである。そこに咲く花を摘んだというので、たった今、彼があのように恥ずべきやり方で罰せられたその道に、同じだけの誘惑を受けながら、彼女がほんのわずかでも足を踏み入れていないとは、信じられなかった。そして、この場合がそれに当てはまるというのなら、老人のいる前で、彼女を自分がされたのと同じ仕打ちにあわせてやろうという欲望に身を焦がして、この目論見を実行する機会ばかりを追求した。

たまたまピアーキが屋敷を空けたある日のこと、ニコロがエルビーレの部屋の側を通ると、不思議なことに、中から話し声が聞こえた。悪意に満ちた希望が直ちに閃き、腰を低くして、目と耳を鍵穴に押し当てると、彼は見た。——果たして！ 彼が見たものは？ そこでは、恍惚とした様子で、彼女が何者かの足元に膝を突いていた。相手は判然としなかったが、まさしく愛のアクセントつきで発せられた、コリーノという囁き声のはっきりと聞き取られた。こちらの意図を気取られず、部屋の出入りに目を光らすことができる回廊の窓に、心臓を強く動悸させながら、彼は身を凭れさせた。そして、そこからすぐに聞こえたカチャリという小さな鍵の音によって、偽善者の化けの皮を剥ぐ

絶好の機会が到来したことを、彼は確信したのであった。そこに、ぼんやりした落ち着いた視線を遠くから彼に向かって投げながら、待っていた見知らぬ男ではないエルビーレその人が、誰のつき添いもなしにその部屋から出てきた。一反の手織りの亜麻布を小脇に抱えていた。そして、腰のところから取り出した鍵で部屋に錠を降ろすと、手すりに手をやり、落ち着き払った様子で階下に降りていった。この偽装や、外見上のぼんやりさ加減は、悪辣と厚顔の極みであるように彼には感じられた。視界から彼女が消えるやいなや、鍵を入手するために、彼はすぐに駆け出した。そして、おずおずした視線を周囲にサッと走らせた後で、ソツとその部屋の扉を開けたのであった。しかし、その部屋には誰もいないと分かった時の彼の驚きたるや、どれほどであったか。くまなく四隅を探したが、赤い絹のカーテンの奥にある壁龕の中に掲げられた妙なる光を浴びる等身大の若い貴族の絵を除けば、わずかでも人を思わせるものは何もなかった。ニコロの中に戦慄が走った。しかし、その理由が何かは分からなかった。ジッと自分を睨みつける肖像画の大きな目を前に、胸の中を沢山の思考や感情が去来していた。しかし、まだそれらを集めて、秩序づける前に、エルビーレに見咎められて、罰を受けるのではという恐怖の方がすでに彼を驚愕みにしていた。少なからぬ混乱の中、再び扉に錠を降ろして、彼はその場を後にした。

この奇妙な出来事について考えれば考えるほど、見い出された絵はますます重要なものになり、肖像画が誰を描いたのかを知りたいという好奇心は、痛みを伴う激しいものになった。というのも、彼は、彼女が跪いているのを身体の輪郭全体で見たのであり、彼女がキャンバスに描かれたあの若い貴族の像の前で跪いていたのは、余りにも明白なことだったのである。ざわつく心に支配されながら、彼はザビエラ・タルティーニの許を訪れると、自分が体験した不思議な出来事を話して聞かせた。エルビーレの破滅という点でニコロと同じ利害を同じくしていたザビエラは、彼との交際のあらゆる困難が彼女に由来していたこともあり、大胆にも、エルビーレの部屋に掲げられているその肖像画を、一度、見てみましょうと、言った。なぜなら、彼女はイタリアの貴族との間に極めて幅広い知遇を誇っており、渦中の人物がかつてローマに住むひとかどの人物であったのなら、素性を特定できると考えたのである。案の定、それからすぐの日曜日、ピアーキ夫妻が親戚を訪ねるために田舎に遠出するということがあり、屋敷から人がいなくなると分かるや、ニコロはもうザビエラのところに走り、絵や刺繍を見せるという口実の下、枢機卿との間にもうけた幼い娘と一緒に、見知らぬ婦人として、彼女をエルビーレの部屋に案内したのであった。しかし、カーテンを少し上げるとすぐ、小さなクララ（それが、娘の名前であった）が、こう叫んだ時のニコロの驚きたるや、どれほどであったか。「神よ、父なる神よ！ シツニョール・ニコロ、これって、お父様じゃありません？」――ザビエラは言葉を失った。実際、見れば見るほど、その絵は、本当に彼と瓜二つであった。よく思い出せる記憶の中の、数ヶ月前、密かにカーニバルに行った際の貴族の装束の彼を想像すれば、それはなおのことであった。ニコロは、冗談を言うことで、頬に現われた急な紅潮を打ち消そうとした。彼は、幼い少女にキスをしながら、本当だね、可愛いクララ、自分はお前の父親だと信じる男がお前とよく似ているように、この絵はわたしによく似ている！ と、言った。――しかし、胸の奥で苦々しい嫉妬の感情が動いていたザビエラは、彼を一瞥すると、鏡の前に立ち、結局、この絵が誰

だってどうでもいいことじゃないと言い残すと、冷たくさよならの挨拶をして、その部屋を後にしたのであった。

ザビエラが帰るやいなや、ニコロは、この事件についての強い興奮の中に置かれた。いやまず喜びと共に、あの夜の空想的な扮装によって、エルビーレが奇妙な激しい驚愕に陥ったことを、彼は思い起こしていた。有徳の見本のような女の情熱を呼び覚ましたという思いは、女をひどい目にあわせたいという欲望と同じくらい、心地よく彼の心に纏わりついた。一度の打撃で、二つの欲望を（ひとつだけでなく、もう片方も）満足させる展望が開かれたので、ジリジリとした思いで、彼はエルビーレの帰宅と、彼女の瞳への一瞥によって、ぐらつく確信に栄冠が与えられる瞬間を待つことになった。酔ったような状態の彼を止められるものは何もなかった。ただ、鍵穴から盗み聞きしたあの時、エルビーレが跪いた先の絵のことをコリーノと呼んだという、あのはっきりした記憶は別であったが。しかし、こちらの地方では余りなじみのないこの名前の響きにさえ、理由は分からぬが、心を甘い夢に誘う様々の要素があった。二つの意味のどちらを取るか、視覚と聴覚のどちらを疑うかという二者択一を迫られて、当然、気もちはより楽しく欲望に囁きかける側に傾くのであった。

そうするうち、何日かぶりにエルビーレが田舎から帰ってきた。彼女は、訪問した先のいとこの家からローマを見物したいというひとりの若い親戚の女性を伴ってきて、その世話につき切りになったので、にこやかに手を貸して馬車から降ろしてくれたニコロにも、ぞんざいで、短かい一瞥を投げただけであった。彼女のもてなしのために捧げられた数週間は、この屋敷には似つかわしくない喧騒のうちに過ぎていった。ローマ内外の、実際、彼女のような人生を楽しむ若い娘には目新しいと思われるあらゆる場所が訪ねて回られた。ニコロは接客の業務があったので、これらの小旅行にはただのひとつとして招かれず、再び、エルビーレに対する最悪の気分の中に落ち込んでいった。彼は、彼女が密かに操を守り、崇拜している知らない顔の男のことを、苦々しくも苛まれるような気持ちで、再び、考え始めていた。そして、この思いは、とりわけ憧憬をもって待ち望んだその若い親戚のようやくの出発になったその夕べ、すさんだ彼の心を引き裂いたのであった。というのも、エルビーレは、さあお喋りをとはならず、押し黙って、まる一時間、ちょっとした女の手仕事にかまけて、食卓に座り込んでいたのである。たまたま、子どもの頃、ニコロがそれで字を覚えた象牙製の小さな字母入りの箱（もう誰も使わず、近所の子どもに譲ってはと、老人が思いついていた）はどこへ行ったかと、数日前、ピーアキが問いあわせていた。古ぼけた雑多なガラクタの山からそれを探せと言われた女中は、しかし、ニコロ（NICOLÒ）という名を構成する六つの字母しか、見出すことができなかった。おそらく他の字母は少年との関わりが薄く、ほとんど注意も払われず、どんな機会でもかは分からないが、売られてしまったのであろう。さて、ニコロは、数日前から食卓の上にあったその字母を手を、食卓の天板に片肘を突いて、暗い物思いに沈みながら、それらを弄んでいた時、見出したのであった――たまたま、本当に、ひとりでにそうだったので、かつてないほど彼は驚いたのだったが――、それが、コリーノ（COLINO）という名の組みあわせを生み出すということ。自分の名前の文字謎的な性質には何の興味もなかったニコロは、改めて、荒ぶる希望に取り憑かれると、おずおずとした臆病な視線を隣りに座っているエルビーレに向かって投じた。

二つの語の間に組織されていると分かったこの一致には、単なる偶然以上のものがあるように、彼には思われた。喜びをひた隠しにしながら、この奇妙な発見の影響する範囲について思いを巡らせると、食卓から両手を離して、心臓を高鳴らせながら、エルビーレが顔を上げて、あからさまに置かれたその名前に目をやる瞬間を待ち受けたのであった。何にしても、期待は彼を裏切らなかった。というのも、エルビーレは、手待ちができた時、並んでいる字母に気がついて、軽い近視だったのもあって、無邪気に深い考えもなく、それらを読むと身を屈めたが、すぐさま、無関心を装ってそれを眺めるニコロの顔に奇妙で不安げな視線をサッと投げると、言葉では表わせない憂いの表情を浮かべながら、再び仕事を手に取ったのだが、誰も見ていないと考えて、かすかに頬を紅潮させながら、ポトリポトリと涙を膝に落としたのである。彼女には目をやらずに、これら全ての内的な動揺を読み取ったニコロは、彼女がこの字母の配置の中に自分の名前だけを隠したということ、もはや疑わなかった。彼女が、不意に、優しく字母を崩すのを見て、荒ぶる希望は、確信の頂点にまで達したが、彼女はすぐに立ち上がると、手仕事を片づけて、自分の寝室の中に消えた。すぐに彼も席を立て、後を追おうとしたが、そこにピアーキが入ってきて、エルビーレはどこだ？ と、聞いて、「ご加減が優れず、ベッドで横になっておられます。」と、女中が答えると、特にそれには驚かず、回れ右をして、彼女の様子を見にいった、それから十五分後、エルビーレは食事をしないという知らせをもって帰って、それ以上、何も言わなかったので、ニコロは、自らが体験した様々の謎めいた全騒動の鍵を掴んだと信じた。

翌日、破廉恥な喜びに浸って、この発見から生み出される利益についてあれこれ考えていると、エルビーレについて興味がありそうな情報を教えてあげられるから、こっちにいらっしゃいと書いた、ザビエラからのメモを渡された。ザビエラは、自らを囲っている司教を通じてカルメル会の僧侶たちと極めて近い関係にあった。そして、ニコロの母が、懺悔でこの修道院に通っていたのもあって、彼らであれば、自らの人倫に反する希望の裏づけとなる彼女の感じやすさの秘められた歴史についての報告を集められると、彼は信じて疑わなかった。しかし、不愉快にも、奇妙ないたずらっぽい挨拶の後、ザビエラが、笑いながら、座っている長椅子のところまで彼を引っ張っていき、わたしが、今、打ち明けなければならないのは、エルビーレの恋の相手が、十二年も前、とっくに墓穴での眠りに就いた死人だということよと、言うやいなや、彼は揺籃から振るい落とされた。――養育されていたパリの叔父からコリンという異名を与えられて、後年、イタリアで、興が乗るままにそれがコッリーノ（COLLINO）に変化したモンフェラント侯爵アロイジウスは、エルビーレの部屋の赤色の絹のカーテンの奥の壁龕の中に見い出された、あの絵のモデルであり、彼女の幼少期、かくも気高いやり方で火事から彼女を救い出し、その際の傷が元で亡くなった若きジェノバ人の貴族であった。――この秘密は、カルメル会の修道院で、本来、そういう権限がない方から厳秘という印章つきで教えてもらったものだから、これ以上は広めないでねと、彼女はつけ加えた。顔を赤や青に変えながら、心配はいらないよと、ニコロは請けあったが、ザビエラのいたずらっぽい視線の前では、いつもながら、この告白で自分が突き落とされた困惑を隠し通せず、呼ばれている仕事があると偽わると、醜く上唇を引き攣らせながら、帽子を取って、さよならを言って、その場を後にした。

かつて行なわれた中でも、最も忌まわしい行為に手を染めるために、今や、恥辱と情欲と復讐心は一体となった。エルビーレの純粋な魂は策略でしか打ち負かせないと、心底、彼は感じていた。そして、何日か、田舎へ遠出することになったピアーキが、この戦場を彼に明け渡すやいなや、自らが考案した悪魔のような計画を実行に移すための準備に手をつけた。夜更けに、密かにカーニバルから戻った数ヶ月前、エルビーレに見られたのと寸分違わぬ衣装を、再び、彼は調達した。そして、ジェノバ風に裁断したマント、上着、羽根つきの帽子をあひの絵の通りに着こなすと、就寝時刻の直前、エルビーレの部屋に忍び込んで、壁龕の中の絵の前には黒い布を垂らして、杖を手に、モデルの若い貴族の姿勢を取って、エルビーレによる神格化を待ち受けたのであった。果たして、恥知らずの情熱から来る洞察力により、彼の見立てに狂いはなかった。なぜなら、その直後に入ってきたエルビーレは、いつも通りの静かで落ち着いた脱衣の後、壁龕を覆う絹のカーテンを開けて、そこに彼を認めるやいなや、すぐに、コリーノ！ 愛しい人！ と、叫んで、気を失ない、タイル張りの床の上に倒れ込んだのであったから。ニコロが壁龕の中からむっくりと姿を現わした。その魅力に見惚れて、一瞬、彼は立ち尽くすと、死神の接吻でみるみる青ざめていく優美な姿を見つめていたが、時間もなかったので、すぐに彼女を抱き上げると、黒い布を絵から引きちぎりながら、部屋の片隅のベッドの上まで運んでいった。そこまでのことをして、扉に鍵を掛けるために歩いていったが、そこにはすでに鍵が掛かっていた。それから、彼は、彼女の混濁した意識が回復した後でも、幻想的で、パッと見、超自然的なその扮装には、何の抵抗も示すまいと確信すると、今や、再びベッドに舞い戻り、胸と唇に熱いキスをして、彼女を目覚めさせようとした。しかし、悪事後の後をピツタリと尾けている復讐の神ネメシスは、まさにその時、悪党があと何日か戻らないと踏んでいたピアーキを全く思いも寄らぬ形で屋敷に舞い戻らせていた。ピアーキはエルビーレはもう寝ていると思って、静かに廊下を通り抜けて、鍵はいつも携行していたので、到着を予感させるいかなる物音も立てずに、突然、やすやすとその部屋に足を踏み入れることができた。ニコロは、雷に撃たれたように立っていた。彼は、自らの悪事をどうやっても隠すことができず、老人の足元にすぎると、今後、あなたの妻の前には二度と姿を現わしませんと誓って、赦免を求めたのであった。そして、実際、老人の心も、事を穏便に済ませる方向に傾きかけた。しかし、彼は、自分の腕に抱かれて正気を取り戻したエルビーレが、驚愕の視線を投げながら卑劣漢に発した数語の言葉に絶句して、彼女がその上で寝ていたベッドのカーテンをサッと引き抜くと、壁からは鞭をむしり取り、扉を開けながら、今すぐに出ていけと、道を示したのであった。ところが、骨の髄までタルチュフのこの男は、その方法に何の効力もないと見て取るや、突然、床から立ち上がると、老爺よ、完璧に有効な書類が任命している所有者はむしろわたしであり、この世の誰であろうと、自分の権利を主張するやり方は心得ているのだから、家を空け渡さねばならないのはお前の方だ！ と、断言した。――ピアーキは、わが耳を疑った。この前代未聞の鉄面皮にすっかり毒気を抜かれて、鞭を脇に置くと、帽子と杖を取り、すぐに古くからの法曹界の友人、ヴァレリオ博士の許に飛び、女中を呼び鈴で呼び出して、扉を開けさせて、博士の部屋に足を踏み入れるやいなや、まだ一言も口にせぬうち、ベッドの脇に倒れ伏してしまった。彼と、後にはエルビーレも屋敷に迎え入れた博士は、すでに翌日には、様々な強みをもつ地獄の極悪人の逮捕を確かなも

のとするべく、走り出していた。しかし、一度は名義変更した領地から再び彼を放逐しようと、効かない梃子をピアーキが当てている間に、すでにしてニコロは全財産に関する証書を手し、友人のカルメル会修道士の許に飛び、追い落としを狙う老爺の阿呆から自分を守って下さいと、頼み込んでいた。つまるところ、司教が縁を切りたがっていたザビエラとの婚姻を彼が受け入れるやいなや、悪に凱歌が上がった。聖職者からの請願に基づき、政府はこの件でのニコロへのつきまといを禁止する政令を発して、その中で、ニコロには所有を認めて、ピアーキの所有は却下した。

ピアーキは、まさにその前日、あの事件が引き起こした高熱で亡くなった不幸なエルビーレを埋葬してやっていた。これらの二重苦にひどく立腹した彼は、判決文を鞆に入れて、屋敷に乗り込むと、怒りから来る怪力で、生来、ひ弱なニコロを投げ飛ばして、額をグリグリと壁に押しつけていた。犯行が行なわれるまで、屋敷の人々は彼の侵入には気がつかなかった。彼らは、まだ両膝でニコロを挟んで、その口に判決文を押し込んでいるピアーキを見出した。そこまでのことをすると、彼は一切の武装を解き、立ち上がった。投獄されて、尋問されて、絞首刑に処すとの判決が下った。

ローマ教皇領では、赦免を受け入れるまで、いかなる罪人も死刑に処してはならないとの法が支配していた。司教杖が振り降ろされても、ピアーキは頑なにその赦免を拒絶した。自らの行為の罪深さを感得させるため、空しくも宗教がもつあらゆる手段が尽くされた後で、人々は、この先に待つ死を垣間見させることで悔悟の念が呼び覚まされるのを期待して、彼を絞首台に引っ張り出したのであった。こちらにひとりの僧侶が立ち、最後の審判のラッパのような大声で、彼の魂が今まさに陥らんとする地獄のあらゆる恐ろしさを思い起こさせた。あちらにもうひとりが立ち、贖罪のための聖なる仲立ちとしてのキリスト像を手し、永遠平和の住まいの素晴らしさを褒めたたえた。——「お前は、贖罪の恩恵を受け入れるか？」と、二人は問うた。「聖餐式を受けるか？」——否と、ピアーキが答えた。——「なぜ、受けぬ？」——浄福などされたくない。地獄の底まで落ちてやる。天国には迎えられないあのニコロと再会して、この世で果たせなかった復讐をやり遂げることこそが、わが望み！——そうして、梯子に登ると、職務を果たせと、刑吏に促したのであった。結局のところ、刑の執行は中断されて、法に守られた不幸な男を再び監獄に送れとの判断が下された。それに続く三日間、同じ試みが行なわれて、いずれも同じ結果に終わった。その三日目、再び縊られずに梯子を降りよと命じられると、彼は自分を地獄落ちさせぬ非情な掟を呪いながら、猛り狂った様子で両手をグッと突き上げた。俺を連れていけと、悪鬼の軍勢に呼び掛けると、処刑されて、地獄に落ちることだけがわが望みと語り、再び地獄でニコロを捕縛するためとあらば、手始めにこの高僧の首から締めてやる！ とさえ断言した。——このことが伝えられると、教皇は、赦免なしに処刑との命令を下した。ひとりの司教のつき添いもなく、全き静寂の中、人は彼をデル・ポポロ広場に吊した。

拾い子 ハイน์リヒ・フォン・クライスト

翻 訳 bambus

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
